

貿易風に乗って

—中部大学国際関係学部論集の発刊に際して—

私たちは、旧『中部大学国際関係学部紀要』の正の遺産を積極的に継承するとともに、近年の大学をめぐる厳しい社会的批判をも正面から直視し、創造的な学部内での研究・教育活動を促進するために新雑誌をここに創刊する。本誌『貿易風』は、困難な出版状況の中で、少なからぬ成果を上げた旧紀要の名誉ある後継者として、本学部の社会的地位を高め、構成員を中心とする学問的切磋の交差点たる自覚を持ち、新しく出発するものである。私たちは、この目的を遂行するため、大学紀要の枠をいったん取り払い、積極的な編集作業をもって責務に応えることを確認しあった。『貿易風』創刊にいたるまで、何回かにわたる教授会での討議、編集委員会での話し合いを通じて、私たちは新雑誌の基本的性格を次のように構想したことを記しておきたい。

1. 本誌は本学部での学術研究活動を進めるため、厳密な査読を経て編集委員会で承認された学術論文を掲載する。この場合、一般専門学術誌に取まらない長大な論考、既成学術研究の領域を超える試論、問題提起的・論争的内容を持つ意欲作を積極的に公刊するための援助を行う。大学による研究費を用いた研究の制度的支援、すなわち公表機会の確保を強化すると同時に、研究助成を受けた成果に対して公的な点検機能をも果たすものである。さらに、本学部構成員を超えた執筆者への依頼も臨機応変に行うことを躊躇しないものとする。こうした形で、多様な形態の論文公表の場たる基本姿勢を維持しつつも、「大学紀要に書く特権」でなく、学部が「外部公表の難しい本格的研究」を財政支援し、研究助成の成果を公開・点検する趣旨を基本姿勢とするものとする。私たちの姿勢は、日本の人文・社会科学への批判喧しい「学術研究の身内化」を超克し、学問研究の外部評価に関連づけ、公費による機関誌刊行の倫理に合致すると考える。
2. 本誌は、学部内の研究活動を促進し、超領域的交流、学部から発信する精力的問題提起の媒体としての自覚を持ち、論文以外の研究ノート、諸論考・彙報（執筆要綱に具体的に記載）を取録するものとする。学部イベントの記録なども精力的に掲載し、「紀要」の原義たる「活動報告」の趣意も復権させたい。旧紀要の最良の遺産の一つである史料翻刻なども継承・発展させるほか、きわめて限定された研究者しか読者を持たない貴重な翻訳類にも場所を与える。こうした諸論考・彙報の掲載は編集委員会の裁量に一任され、掲載内容には編集委員会が責任を負うものとする。
3. 本誌は、さらに学部内での教育活動のうち学術研究に深く関連する事項、たとえば国際関係学部教員が指導する博士・修士・卒業論文関連の情報を掲載するものとする。この種の記事に関する公表の場は本学内で皆無に近かったが、学部の学問的力を高め相互批判を媒介するためには有用な情報である。官僚的特権や領域保守こそ学問の創造とは無縁であり、本誌も掲載内容には超域性を留意したい。

OECDによる日本の社会科学批判やマスコミの大学紀要攻撃開始から4半世紀が経ち、思えば日本近代の代表的知識人による「タコツボ」学問への自省は戦後60年の歴史を持っていたはずであった。戦後改革による大学再編、高度経済成長期の私立大学の増設によって、学問研究を担う研究者の裾野も広がり、旧来の学界の把握領域と研究者層の多様な活動のギャップを非営利出版物たる大学紀要が積極的に埋めた経緯に照らすと、必ずしも紀要は負の財産を残したばかりではない。しかしながら、1980年代以降の広範な超域研究の進展に伴う学界活動の多様化、ジャーナリズムの積極的な学問研究への関与、惰性による紀要論文の地位低下などは、将来にわたって紀要の維持を主張する積極的意義を見出しにくく、その存続を危惧せしめて余りある。さらに、研究への外部評価導入を通じた「開かれた改革」にも齟齬を来たした経緯は、正面から直視しなければならない。一方、現状を保守する選択を行った場合、本来的に市場競争の原理に照応しない非営利出版物の意義そのものも等閑に付され、緊縮財政を標榜する視点から全面排除されてゆく危険性も高いと考えざるを得ない。ここでも滅亡への道は薔薇の花で埋められていて、私たちは、敢然、かもしかみちを選ぶ勇気を選びたい。つまり、非営利出版物の存在意義を再認し、大学の研究活動の不可分な構成要素である事実を立証してゆく方法こそもっとも生産的な態度であると考えられるものである。

未知の進路に向かって出帆するとき、挫折の可能性にたじろぐ保守的な身構えの前に意気喪失しがちである。また、必死の覚悟で進んだつもりになっていても、視界を覆っていた海霧の晴れたあと、気が付けばほとんど前進していない場合もあるかも知れない。しかしながら、仮説と実証を繰り返し、絶えず自己に被せられた枠を外す精神を貫徹することは、失敗を恐れない気概と、行方を阻まれても再出発を辞さない粘り強い知的勇気と一体となって学問研究の本旨をなしているはずであった。私たちは、こうした初心に立ち返り、安定した制度的枠組み、小さな自己完結から大学空間の知を解き放ち、いくら小規模であろうとも知を担う思索の徒たる初心に立ち返りたい。約束された場所などなかったし、完全に保障された航海はありえない。当面の糧食は積み込み、船員は持ち場に着いた。水平線は茫として晴れわたってはいないけれど、無為の平和に惜別の挨拶を送る時が近づいた。さあ、理想を信じて舵を取り、貿易風に身を任せよう！

2006年3月

『貿易風』編集委員会